Kadokawa Comics A

Kadokawa Comics A

第 26 話
パキャ
――オケアノス……

Fate
フェイト/ゼロ
漫画 真じろう
原作 虚淵玄/TYPE-MOON
(ニトロプラス)

第 26 話

Contents

第 26 話
001

第 27 話
023

第 28 話
047

第 29 話
069

第 30 話
097

第 31 話
135

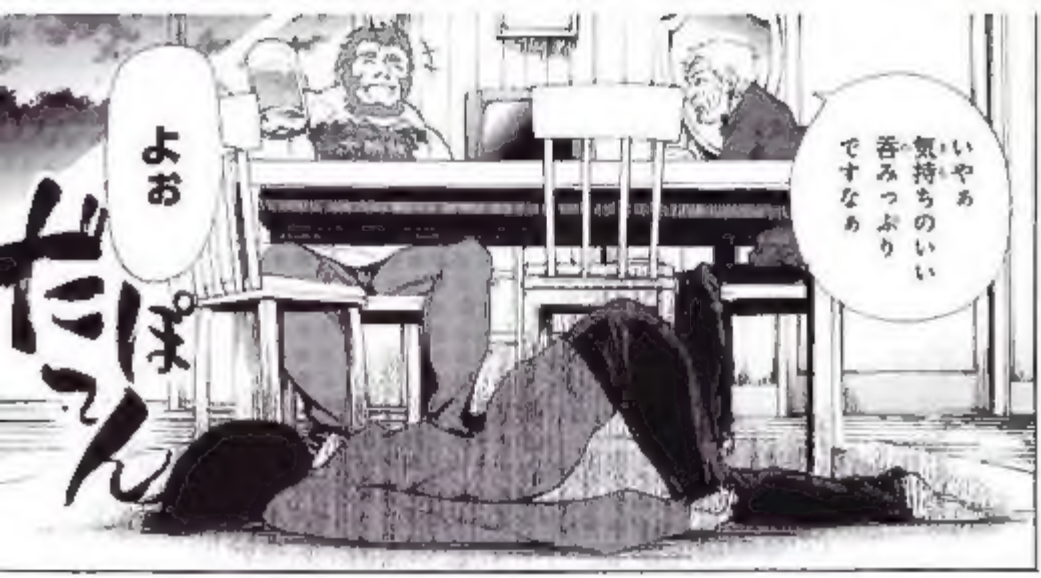
ふひゃ

しまったぁ…
昼寝なんかしてる場合じゃないのに貴重な時間が……

ウェイバーちゃん
アレクセイさんがお着きになられたわよ

……はぁ？
たぱとん
アレクセ……
ALEX……
……ANDER？

ハァ
ハァ
ハァ


いやぁ
気持ちのいい
呑みっぷり
ですなぁ
よお
だぽん

うちのウェイバーも
イギリスから戻る頃には
酒のひとつも覚えて
くるかと期待しとったん
ですがなぁ
まだまだてんで
駄目でして
つまらん思いをして
おったのですよ
ハハハ
彼は遊びを知らん
ですからなぁ
人生楽しんだヤツが
勝ちだとつねづね
言い聞かせとるんですが

駄目じゃない
お客さんが
いらっしゃるなら
もっと早くに
教えてくれなきゃ
判ってたらもっと
ごちそうの準備が
できたのに
……いや
ええ……？

いやいやお構いなく
気取らぬ家庭の味こそ
極上のもてなし故
まぁまぁ
お世辞がお上手だこと
ウェイバーは
まぁあんな気性な
ものですからね
イギリスの学校で上手く
やっていけたのか心配で
ならなかったのですが
あなたのような頼もしい
知己を得ていたのなら
まったく取り越し苦労
でしたなぁ
いやいや
私の方こそ世話に
なっとったのですよ
ほれ このズボンも
彼が見立てて買って
くれたのです
な……なるほど…
そういう設定か
どうです？
格好良いでしょう
さぁさぁ
そろそろ御飯も
炊けますからね
ウェイバー
ちゃんも
席について
ちょうだい

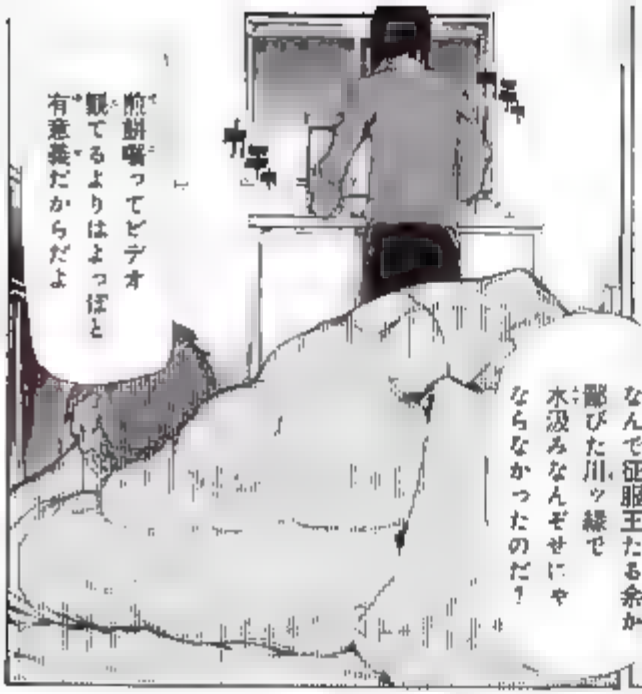
アレクセイさんは
いつまで日本に
おられるご予定で？
まぁ野暮用が片付くまで
一週間かそこいらですかな
もし良かったら
我が家に滞在なさっては
どうですか？
あいにく手狭なもので
客間の用意はないのですが
ウェイバーの部屋なら
布団を敷けばあと一人は
寝られるでしょう

私たちも日本は長いが
初めのうちは驚かされる
ことばかりでしたよ
異国の醍醐味ですな
未知なる驚きこそ我が歓喜
いつの時代もアジアは
余を楽しませてやまない！

フトン？
おおこの国の
寝具ですな！
ぜひ堪能したい！
ハハハ ベットではなく
床に寝るというのは
慣れないうちは
奇妙なものでしてね

結局オマエは何がしたかったわけ？
のし
のし
何って
いや普通に玄関から入ろうと思ったらだな
あまでもして言い抜けなきゃ仕方ないだろう
出入りのときは霊体化しろって！
ハピタイン
ッタッ！
言い聞かせておいただろうかあッ!!
だって霊体化したらコレを持ち込むことができんだろうが

何だか知らんが
コイツを持ち帰るのが
今日の余の務め
だったわけだろう。
そのために
晴れてズボンも
手に入れたのだ
ガルル
そもそも命したのは
貴様ではないか
だからンなもんはこっそり
軒先にでも置いてくれば
後でボクが拾いに行けば
それで済んだんだよ！
お前馬鹿
私が悪いとでも
だったらそれこそ
堂々と玄関から入る
口実を見繕えば
済むことではないか
——っつうか
そもそもこれは
一体何なのだ？


せっかくズボンを
買いたからには
もうちっと華やいだ場所を
散策したかったのに
なんで征服王たる余が
鄙びた川ッ縁で
水汲みなんぞせにゃ
ならなかったのだ？
煎餅噛ってビデオ
観てるよりはよっぽど
有意義だからだよ

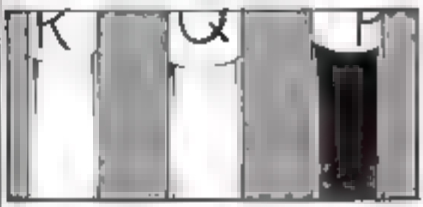
何ぴ 今から錬金術の
真似事でも始めようと
いうのか
真似事しゃなくて
錬金術そのものだ
馬鹿

地図に書いた
場所を間違えて
ないだろうな？
傘を探めとる
のか坊主？
この程度のことで
何をしくれと
いうんだ
キュ

何これクズはこんな
初歩的な偽装を
やってんだろな
……うわ
ズズ…
体それは
何なのだ
術式残留物の痕跡だ
水の中にあった
魔術の名残り
海に隣接する河口の地点で
これだけの反応が出るのは
明らかに異常だ
川の上流——
河口のかなり近くで
誰かが魔術を執り
行ってたってことだ
これを遡れば
その場所を掴めるかもしれない

坊主
あの川の水にそんなものが混じっていると最初から気付いていたのか？
でもせっかく街のど真ん中に流水がある土地なんだ
まずは水から調べるのが当然だろ
まさか
もしこんな手段で突き止めたって自慢にもなりゃしない
こんなの能のない凡人のやりかただ

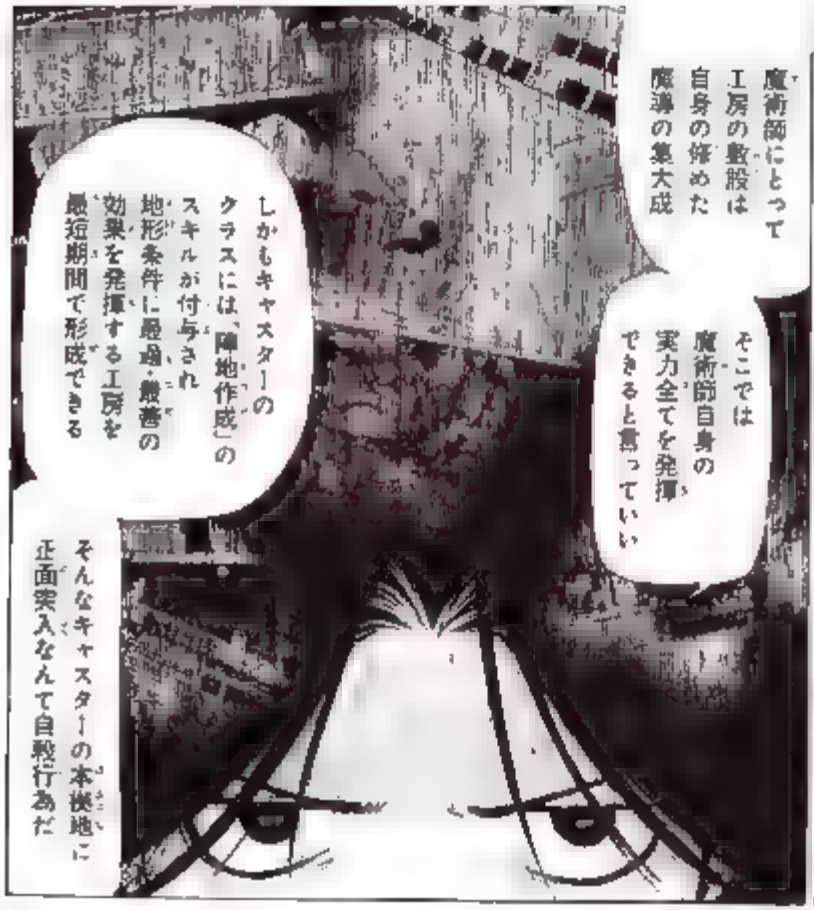
――ッ！


K
Q
P

ライダー
ここととここの間に
何かあったか!?
排水溝とか
用水路の
注ぎ口とか！

おう
一際バカでかいのが一つあったが
それだ！
そいつを追っていった先に多分キャスターの工房がある
しげ
しげ
しげ
な 何だよ ジロジロ見て
坊主もしかして貴様——
えらく優秀な魔術師なんじゃないのか？

こんなのは優秀な
魔術師の手段じゃない
方法としては下の下だ
オマエ
ボクを馬鹿に
してるだろ
何を言うか
下策をもって上首尾に
至ったなら
上策から始めるよりも
数段勝る偉業ではないか
腐るが良いぞ
余もサーヴァント
として鼻が高い！
ハッハッハ！
メポォ
よし
居所さえ掴めりゃ
こっちのもんだ
ビュン
ごろん
きっそく殴り
込むとするか！
き、待てコラ
敵はキャスター
だってのに
いきなり攻め込む
馬鹿がいるかよ


魔術師にとって
工房の数段は
自身の修めた
魔導の集大成
そこでは
魔術師自身の
実力全てを発揮
できると言っていい
しかもキャスターの
クラスには「陣地作成」の
スキルが付与され
地形条件に最適・最善の
効果を発揮する工房を
最短期間で形成できる
そんなキャスターの本拠地に
正面突入なんて自殺行為だ
むんっ

オマエ
なんでまた
今日はそんなに
やる気なんだ？

あのなぁ
戦において陣とは
刻一刻と位置を
変えていくもんだ
位置を掴んだ敵は
速やかに叩かねば
取り逃がした後で
後悔しても遅いのだ

11
当然よ
我がマスターがようやっと
功績らしい成果を見せたのだ
ならば余もまた敵の首級を
持ち帰って報いるのが
サーヴァントとしての
心意気というものだ

そう初っ端から
諦めてかかるでない
とりあえずブチ当たるだけ
当たってみようではないか
案外何とかなるもん
かもしれんぞ

第 26 話　END

Fate

In the battleground, there is no place for hope.

What lies there is just cold despair and a sin called victory,

built on the pain of the defeated.

The world as is, the human nature as always,

it is impossible to eliminate the battles.

In the end, killing is necessary evil-and if so,

it is best to end them in the best efficiency

and at the least cost,

least time.

Call it not foul nor nasty.

Justice cannot save the world. It is useless.

第 27 話

木木市では
今週だけでも　人を
超える患者が
行方不明になっており
警察は五つの捜査員を
投入…
そんな…
夜には絶対
出歩いちゃいけない
って言ったのに――
いなくなった
学校の友達を捜しに
行くだなんて…
いつだって
ごめんなさい
つぼみ。
凛

第27話
ナトネ
この後

お父様から頂いた
この魔力針と
武器として魔力を
込めて作った
水晶片の自信作二つ！
これがあれば
コトネを
探し出せる
優しい場所を
一つずつ
探していけば
きっと見つかる
はずだわ！

誕生日プレゼントだ
これ、魔力針といって
持ち主の魔力を
感じて、ある方向を示す
ような
ズズ
九月
九月
九月
単純な魔導器だが
何らかの怪異が
起こっている場所を
探し当てるのに役立つ
遠坂家の家訓は
覚えているね？
「どんな時でも――
余裕を持って
優雅たれ」

ニコ
見てて、ください、お父様
私もきっと「お父様」のような
完璧で、素晴らしい人間に
なってみせます
私の父、凛とない、
偉大な魔術師、
ちっちゃ
私一人でコトネを
見つけて、連れて
帰ってみせます！

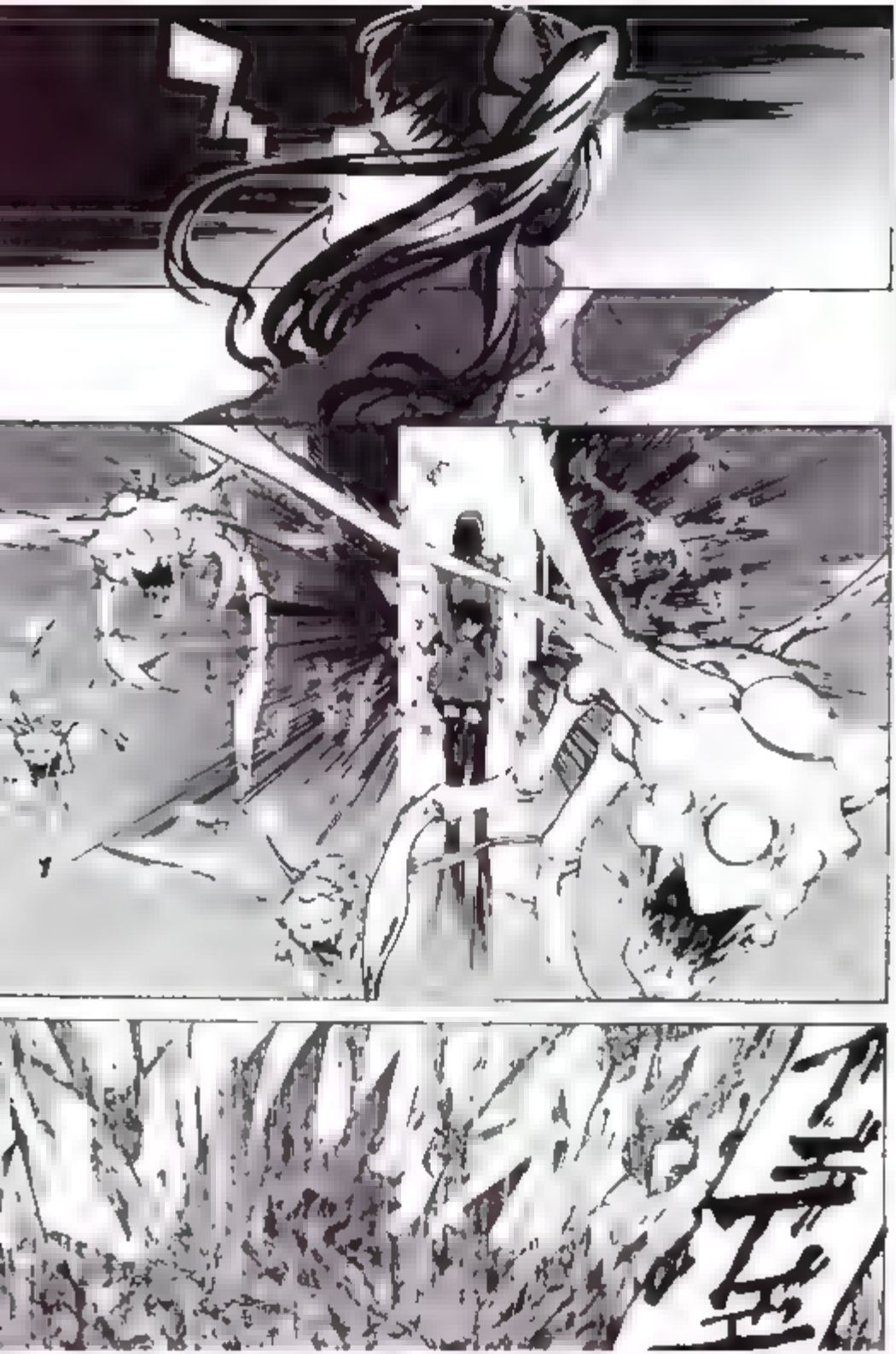
行ってきて
コトネ！
ガガガ…
なにこれ？
こんな反応
見たことないわ…
あの子
人じゃないの？
男の子呼んだ方が
良いかな
ダス
ふれ

あっ
やばっ！
ﾄﾛﾛﾛ
ﾄﾛﾛﾛ
ﾍﾍﾍﾍ

の野良猫かしら？

まず…
臭いじゃない
調べましょう？
この先に何か
あるんだわ…
魔力を放つ何かが…

イヤッ——



何度も冬の
現状について
私は考えてみた
こんなことになるな
言葉を濁さずに
はっきりそう言えばよかった
「その友達のことは
もう忘れなさい」って
同じ
に頼る
ばかりな

凛！
良かった……
本当に……

そこにいるのは誰!?
あれから一年か…
最後に会ったのはこの場所だったね
ここで待てばきっと見つけてくれると思ってた
櫂夜くん…

！
これが——四桐の魔術だよ
肉を捧げ 命を触まれ……
それを代価にして至る魔導だ
——その：顔は……？
何？
どっ…どういうことなの？
どうしてあなたがここに？
でもね
桜ちゃんは大丈夫
こんなことになる前に俺がきっと救い出す

魔祝が
欲しいのは
聖杯だけだ
俺がそれを
勝ち取れば
祝ちゃんを
解放すると
あいつは
そう約束した
だから
俺が必ず……
セイバー
ハイ……？
心配ないよ
お……俺の
サーヴァントは
最強なんだ！
誰にも負けるはずはない

ああ――そんな――
そんな……神様……
今の桜ちゃんにとってはね
希望を抱くことさえ辛い責め苦にしかならない
だから……
あの子の代わりに妻さん
貴女が信じて祈ってくれ
桜ちゃんの未来を
瓶覗くん
あなたは
彼の勝利を

いつかきっと
この公園でまた
昔みたいに皆で
遊べる日が来るから
凛ちゃんも
桜ちゃんも
もとの姉妹に
戻って
だから葵さん
貴女はもう
泣かなくていい
雁夜くん
待って

Fate

In the battleground, there is no place for hope

What lies there is just cold despair and a sin called victory,

built on the pain of the defeated.

The world as is, the human nature as always,

it is unpossible to eliminate the battles.

In the end, killing is necessary evil-and if so,

it is best to end them in the best efficiency

and at the least cost,

least time.

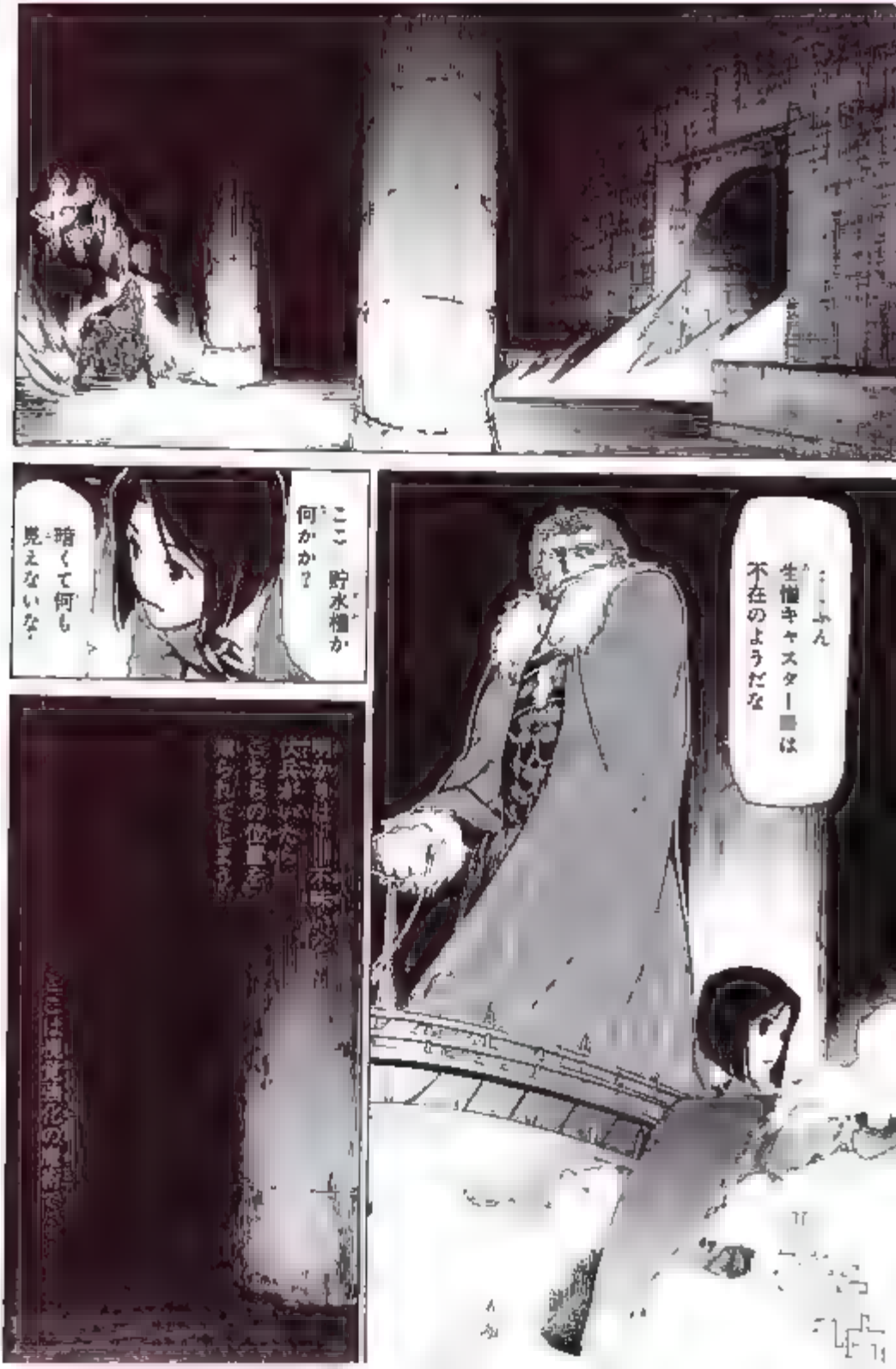
Call it not foul nor nasty.

Justice cannot save the world. It is useless

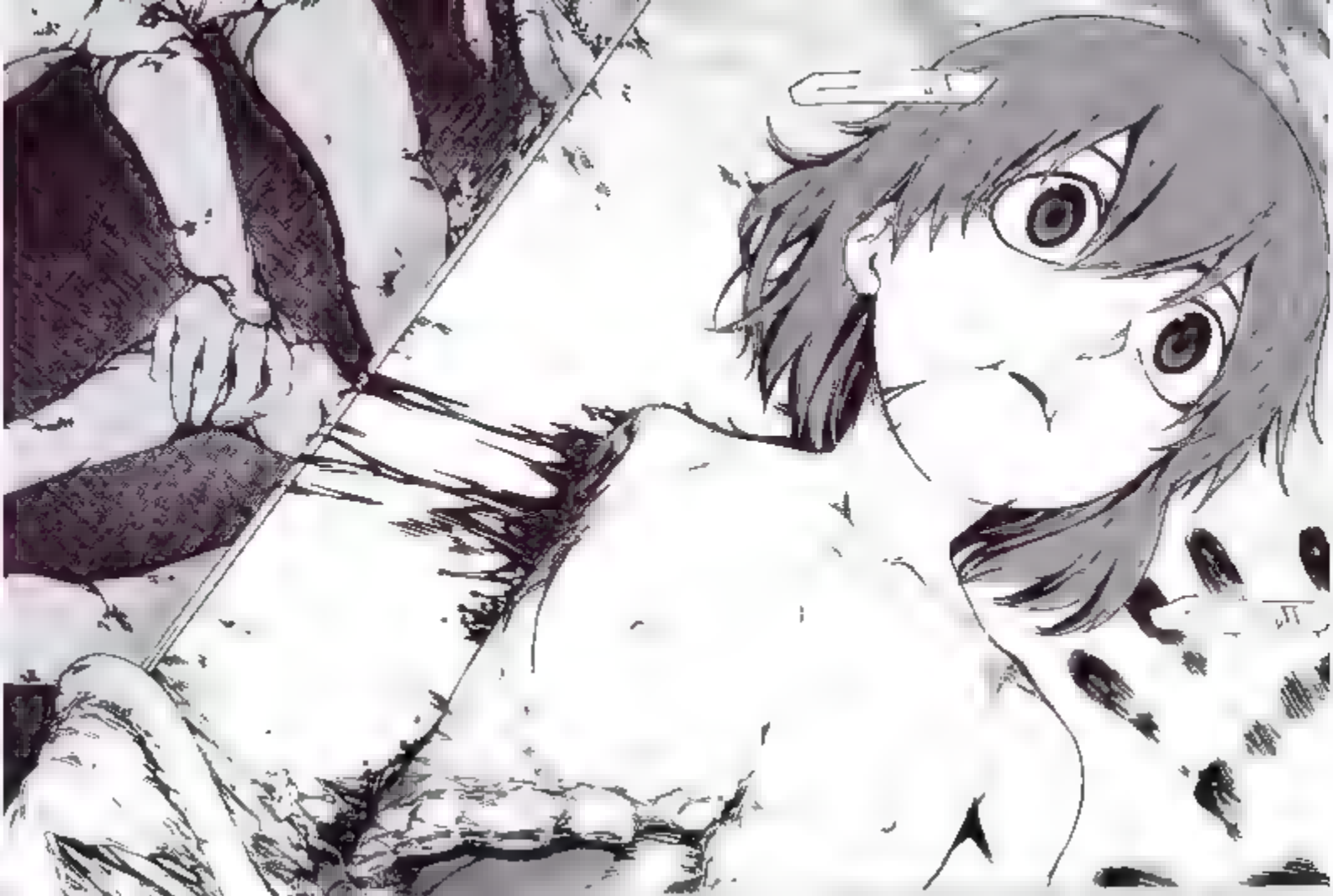
こいつは好都合だ
ライダーのマスターは警戒が甘い
僕を見てその首を取ってやる
ここでライダーを倒せれば聖杯戦争も終わりなもであろうよ
キャスターの工房への侵入は容易にならずとも令呪なしに対魔力の英霊を召喚してくれるやもしれん
消滅して再臨の儀式をやり直すぞ

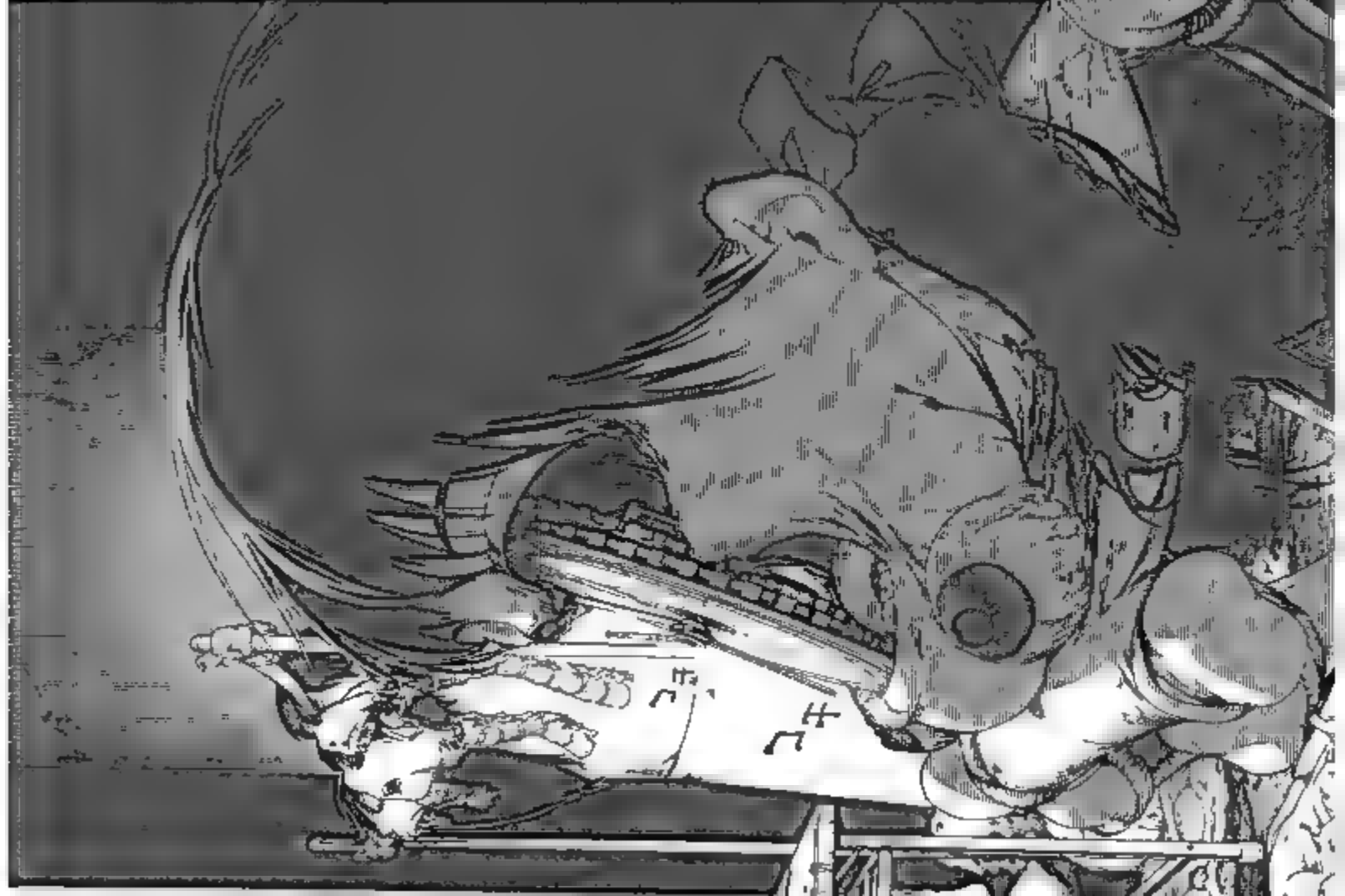
第 28 話

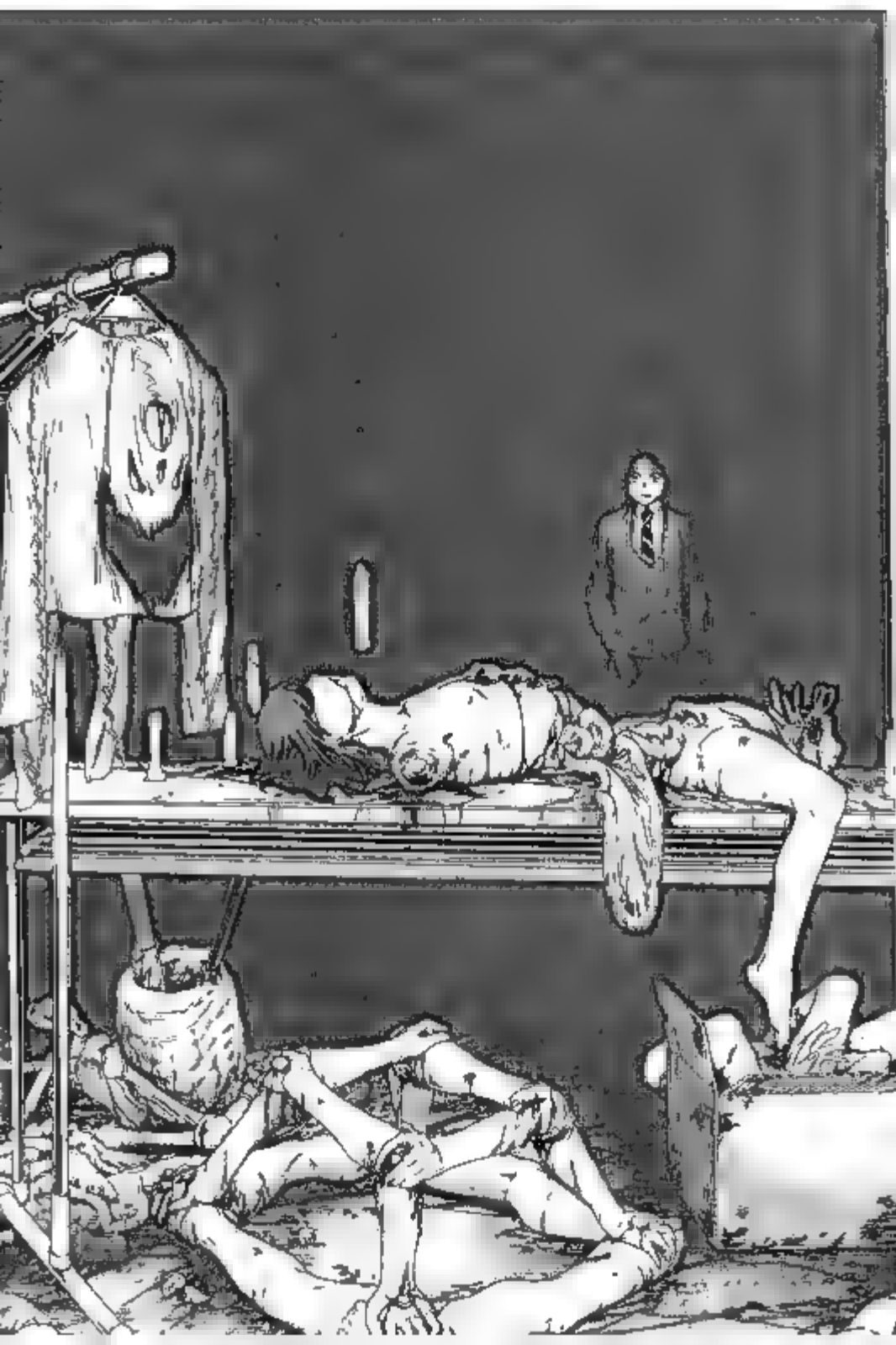
たとえば生前の伝承に
悪魔を呼んだとか
魔導書の類を
持ってただとか
そういう逸話が語り
継がれているだけで
本人が魔術師として
知れ渡っていた
わけじゃない
要素だとしたら——
かとえキャスターとして
現界してもその能力は
限定的なものに
なるんじゃないかな
大体これが本格的な
工房だとしたら
ああも無防備に廃棄物を
垂れ流してたのは変だ
まともな魔術師だったら
あんな失態は有り得ない
ふーん
そんなもんかい
そろそろ終着点かっ
ごんっ


…ふん
生憎キャスター■は
不在のようだな
ここ　貯水槽か
何かか？
暗くて何も
見えないな
■■■

あ～～～坊主
こりゃ見ないでおいた方が良いと思うぞ
何言ってんだよ！
キャスターがいないならせめて居場所の手掛かりぐらい探し出さなきゃ始まらないだろ！
そりゃそうかもしれんが止めとけ坊主 こいつは貴様の手にゃ余る
うるさい！
汚水かぁ



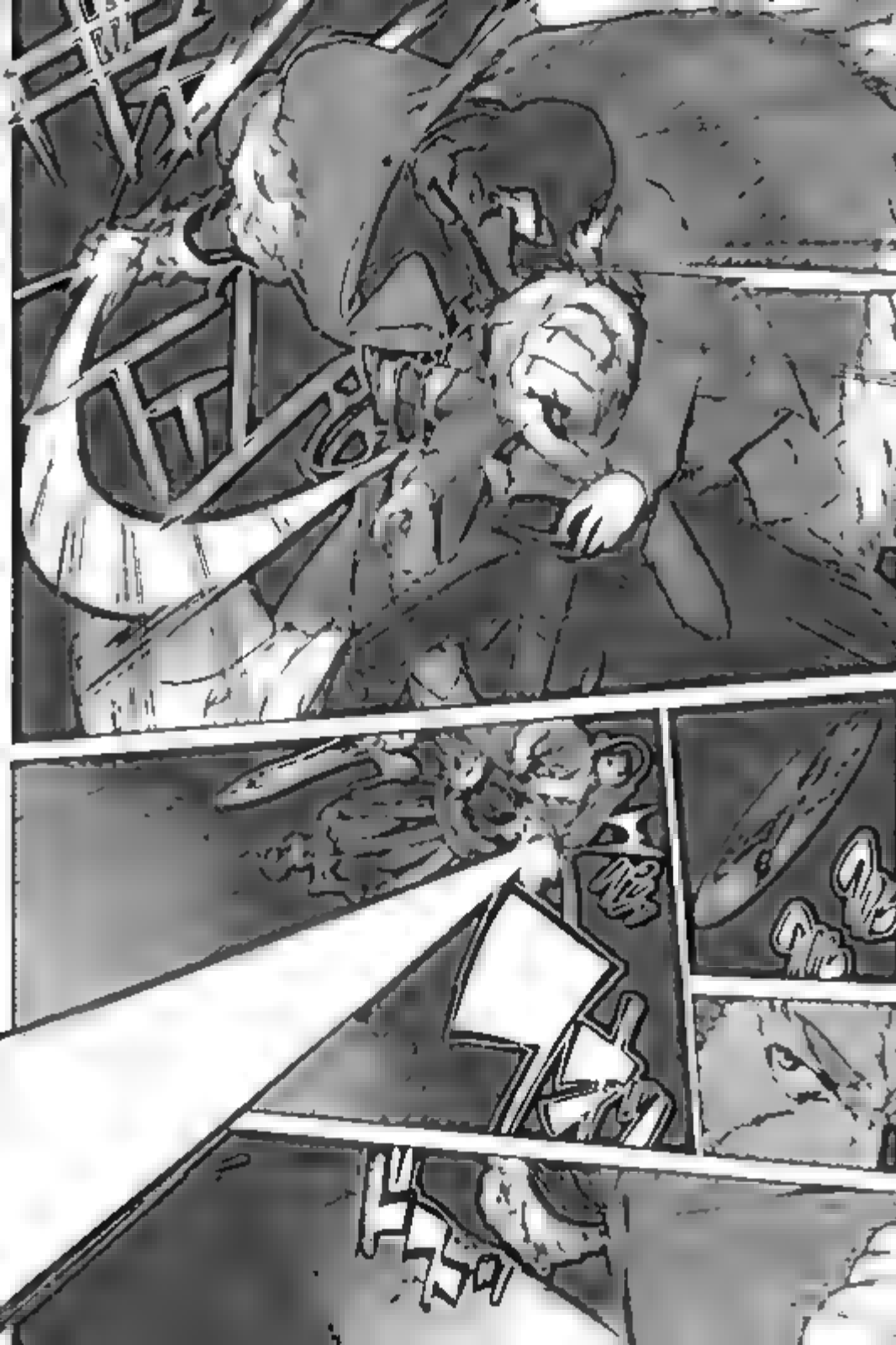




ぺた
ぺた
うっ
ビチャ
ビチャ
ビチャ

いいんだよ
それで
こんなモノ見せられて
腸ひとつ動かさぬ奴がいたら
余かブン殴っておるわい
むしろ貴様の判断を
誉えるぞ 坊主
キャスターとその
マスターを真っ先に
仕留めるという
方針は"良し"だ
成る程 こういう場中
とあっては 分一秒
生き長らえさせて
おくのも御愛敬い

何が……
「ブン殴る」だよ
馬鹿ッ
オマエだって今
全然平気な顔して
突っ立ってる
じゃないか
アザマなのは
ボクだけ
じゃないか！
今は気を張ってて
それどころ
じゃないわい
へ
なんせ余の
マスターか
殺されかかって
るんだからな



アサシン……
そんな馬鹿な!!
言いている場合じゃないぞ坊主
!!
どどど
どうして……
何で
アサシンが
四人も
いるんだ!!
何故も
へったくれも
このさい関係
なかろうて

ドン
!

逃げた――のか？
否
二人死んでも
なおまだ二人
この調子じゃ一体
何人のアサシンか
出てくるやら
知れたもんしゃない

ここは
このまま
放っとくのか？
調べりゃ何か判る
かもしれんが
諦めろ

ここは拙い
ヤツら好みの環境だ
坊主 命の戦車に戻れ
きっさと退散するぞ
いざ走りだせば
道中とて手出しは
できん

まだ息がある
奴なら何人かいる
か
あの有様しや
殺してやった方が
情けってもんだ

生き残りは――

とりあえず
ブチ壊せるだけは
壊していくさ
それはそれで
キャスターの
足を引っ張る
戦果にはなる

狭苦しい処を
済まんが
念入りに頼むぞ
ゼウスの仔らよ
灰も残さず
焼き尽くせ！

こうして視域をブッ潰されればキャスターは逃げも隠れもできん
後はふらふら炎に迷い出てくるしかあるまいて
ワッハッハッ
ちょー判ったからーッ
彼奴らに引導を渡すのもそう遠い話じゃないさ
やめろ！ソレ！

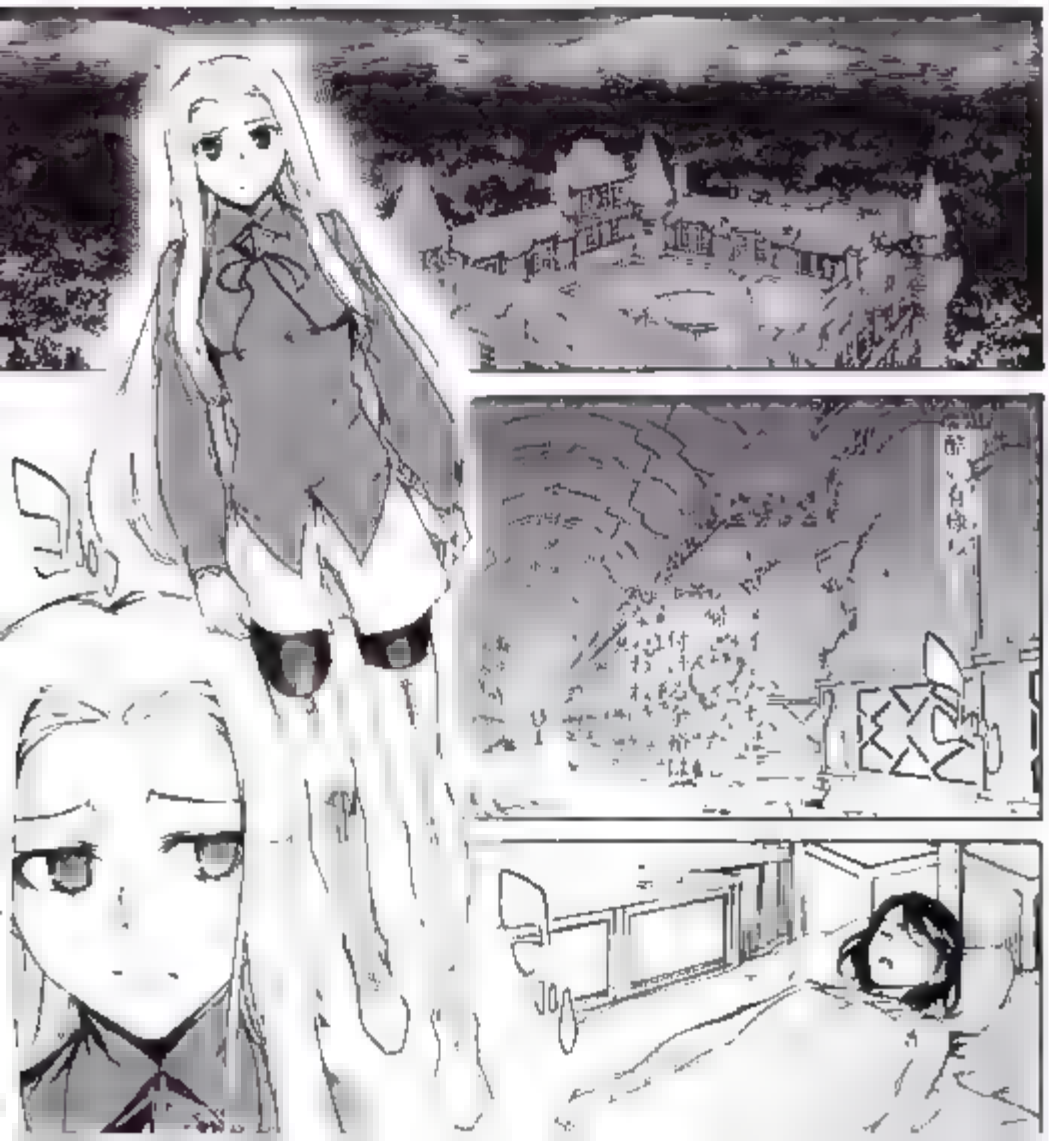
やれやれ
辛気くさい場所
だったわい
今夜はひとつ
盛大に飲み明かして
酔情を晴らしたいのう
断っとくが
ボクはオマエの
酒になんて
付き合わないぞ
というか
飲めないんだけど
ふん 貧相のような
セロテコに相手なんぞ
期待しとらんわ
あくつまらん
どっかに金を
心底よく酔わす
酒豪はないもんかのう
ガハハ!
名案が浮かんだぞ!
END

第29話 酒

うちの酒蔵に泥棒が入ったみたいでさぁ
アンタんところに納めるはずだったワイン樽が消えてるのよぉ
せん
ガバッ
断じて許せん!!

巷湾地区爆破テロにビル爆破倒壊事件に連続児童誘拐殺人事件
挙げ句の果ては酒蔵襲撃酒樽強奪事件まで！
言語道断不届き千万！
この街は一体どうなってるんだァ！
もう我慢ならん！
冬木の平和はこの私…
藤村大河が守ります！

—103:11:39



師弟さんも同じようなもんは
さぁ 時間がかかるでしょう
剣と戦闘の他すべてに
心を出て行った者り帰ってこない
行動は続けられなかったけれどきっとケイネスの師を追ったのでしょうね
……

結界の術式を破壊された！
……ッ!!
なんてこと…正面突破ってわけ？

大丈夫ですか
アイリスフィール
ええ平気よ
ちょっと不意を
討たれただけ
行きましょう
さっきの雷鳴
憶えることを知らぬ
この出方
敵はライダーでしょう
ええ
でしょうね

おおい 騎士王！
わざわざ出向いてやったぞぉ！
なんだ 顔を出したのか
あん？！
ライダー!!
体何のつも……

いよぉ
セイバー
よ
城を構えてると聞いて
来てみたが何とも
シケた所だのぅ ん？
こう駐車が多くちゃ
出入りに不自由だろうに
途中で迷子になり
かかったんでな
余がちょいと偵察
しておいたから
有り難く思うがいい
かなーり見晴らしが
よくなってるぞ

ライダー
貴様 何をしに来た？
一献交わしに来たに決まっておろうが
見て解らんか？
ドヤッ
ほれ そんな所に突っ立ってないで案内せい
どこぞ妻に逃え向きの庭園でもないのか？
アイリスフィール どうしましょう？
わ 屋とか…
そういうタイプじゃないものね 彼
まさか本当に酒盛りがしたいだけ？
あの男 やっぱりセイバーを懐柔したくて仕方ないのかしら？
いいえ これは歴とした挑戦です

挑戦う
はい
我も王 彼も王
それを幷えた上で
酒を酌み交わすというのは
ならそれは剣に依らぬ
戦いです
解ってあるではないか
剣を交えるのが
憚られるなら杯を
交えるまでのこと
騎士王よ
今宵は貴様の
「王の器」を
とことん問い質して
やるから覚悟しろ
これは冗談事
ではない
真剣勝負
なんだわ
面白い
受けて立つ!

いささか珍妙な形だが
これがこの国の
由緒正しき酒器だそうだ
ぐび
聖杯は相応しき
者の手に渡る
定めにあるという

そのための儀式か
この冬木における闘争
だというが
とりあえず
今は休戦
ということで
了解
なにも見極めを
つけるだけならば血を
流すには及ばない
英霊同士
お互いの格に
納得がいったなら
それで自ずと
答えは出る
それでまず
私と格を競おう
というわけか？
その通り
いわばこれは
「聖杯戦争」ならぬ
「聖杯問答」
騎士王と征服王
どちらが聖杯の王
に相応しき器かを
酒杯に問うのだ
ああそういえば
我らの他にも
王だと
言い張る童が
おったっけな
二月
二月

我れはそこまでにしておけ 雑種
アーチャー
何故ここに
いやな
街の方でこいつの姿を見かけたんで誘うだけは誘ってもいたのさ
よもやこんな場所を「王の宴」に選ぶとは底が知れるというものだ
我にわざわざ足を運ばせた非礼をどう詫びる？

まぁ固いことを言うでない
ほれ駆けつけ一杯
ゲイ
……！
そう これは十の器を賜りし真剣勝負なのよ
何だこの安酒は こんなもので本当に英雄の格が養れるとでも思ったか？
そうかぬ この土地しか なかなかの逸品だぞ
そう思うのはお前が本当の酒というものを知らぬからだ 雑魚め
見るがいい そして思い知れ

これが「王の酒」というものだ
むほぉ 美味いっ!!
むほぉ
ズエなオイ!
こりゃあ人間の手になる鍛造じゃあるまい 神代の代物じゃないのか?
ヤベェ
当然であろう 酒も剣も我が宝物庫には至高の財しか有り得ない

なん…だと…
これで王としての格付けは決まったようなものだろう
ふざけるな 酒蔵自慢で王道を語るなぞ道化の役柄だ
ぐぬぬ…
さもしいな 貴様に酒も食事も供せぬような輩こそ王には程遠い
こらこら
双方とも言い分がつまらんぞ
アーチャーよ 貴様の極上の酒はまさしく至宝の杯に注ぐに相応しい
――が あいにくと聖杯は酒器とは違う
これは聖杯を廻る正当さを問うべき聖杯問答
まずは貴様かどれほどの大望を聖杯に託すのかそれを聞かせてもらわなければ始まらん

さてアーチャー
貴様は――

ひとかどの王として
我らを魅せるほどの
大言が吐けるか？

仕切るな雑種

まず聖杯を奪い合う
という前提からして
理を外しているのだぞ

そもそもにおいて
アレは我の所有物だ
世界の宝物は残らず
その起源を我が超し遡る

いささか時が経ちすぎて
散逸したきらいはあるが
それら全ての所有権は
今もなお我にあるのだ

じゃあ貴様、
聖杯がどんな
もんか正体も
知ってるとう

知らぬ

雑種の尺度で測るでない
我の財の総量はとうに
我の認識を超えている

だが「宝」である時点で
我が財であるのは明白
それを勝手に持ち去ろうなど
盗人猛々しいにも程がある

おまえの言は
キャスターの
世迷い事と
変わらない

錯乱した
サーヴァントは
一人では
なかったらしい

いやいやとうだかな
なんとなく
この金ピカの真名に
心当たりがあるぞ余は
まあこの
イスカンダルより
知度のでかい王
というだけで
思い当たる名は
ひとつだったかな
じゃあ何か？
アーチャー
聖杯が欲しければ
貴様の承諾さえ
得られれば良いと？
然り
我が我の思惟に
与るべきは我の
臣下と民だけだ
おまえが我の許に
下るというのなら
杯の一つや二つ
下賜してやっても良い
でも貴様 聖杯が惜しい
わけでもないんだろう？
望みがあって聖杯戦争に
出てきたわけじゃない と
無論だ だが我の前を狙う
賊には然るべき報いを
下さねばならぬ
それは筋道の問題だ
まぁそりゃ
出来ん相談だわなぁ
つまり何だ
アーチャー？
そこにどんな
義があり
どんな道理
があると？

法だ
我が王として戦いた
我が法だ
ふむ 完璧だな
自らの法を
貫いてこそ 王
だがな〜余は
聖杯が欲しくて
仕方ないんだよ
で 欲した
以上は略奪
するのか
余の流儀だ
是非もあるまい
お前が犯し我が裁く
問答の余地など
どこにもない
うむ
そうなると後は
剣を交えるのみだな
征服王よ

おまえは聖杯の正しい所有権が他人にあるものと認めた上でそれを力で奪うのか？
ん？ 当然であろう？
余の王道は「征服」
……即ち「奪い」「侵す」に終始するのだからな
そうまでして聖杯に何を求める？
ゴホ

受肉(じゅにく)だ

はあ？
おおお
オマエ！
ボーン
望みは世界征服
だったんぎゃべッ!!
愚(おろ)かな者
杯なんぞに世界を
獲らせてどうする
征服は己自身に託す夢
聖杯に託すのはあくまで
そのための第一歩だ

雑種 よもや
そのような
瑣事のためにこの
我に挑むのか？
あのな
いくら魔力で現界
してるとはいえ
所詮我らは
サーヴァント
この世界においては
奇跡に等しい
言ってみりゃ何かの
冗談みたいな貴の扱いだ
貴様らは
それで満足か？
余は不足だ
余は転生した
この世界に
一個の生命として
根を下ろしたい

なんで
そこまで肩持ち
するんだよ？
それこそが
「征服」の基点
だからだ
身体ひとつで
我を張って
天と地に向かい合う
それが征服という
行いの始まり
そのように闘い
押し進め
征し切ってこその
我が覇道なのだ

だが今の余はその身体ひとつにすら事欠いておる
誰に憚ることもないこのイスカンダルただ独りだけの肉体かなければならん
これではいかん始めるべきモノも始められん
決めたぞライダー
貴様はこの我が手ずから殺す
フフン今さら命を惜しむまでもなかろうて
今も聖杯のみならず貴様の宝物庫とやらを奪い尽くす気でおるから覚悟しておけ

唯一の望み
あるのみ
そんなものは
王の在り方ではない
ただの暴君の
それでしかない
なあ そういえば
まだ貴様の望みを
聞かせてもらってないが
私は
我が故郷の
救済を願う
万能の願望機を
もってしてブリテンの
滅びの運命を変える

よりにもよって
酒盛りとはな…
アーチャーは
放置しておいて
構わぬもの
でしょうか

仕方あるまい
王の中の王に
あらせられては
突きつけられた
問答は拒めんだろう
うむ
ライダーに
「神殺の車輪」を
上回る切り札が
あるか否かに
尽きると
思われます
ところで綺礼
ライダーと
アーチャーの戦力差
君はどう考える？
未だに必勝法の糸口が
掴めないのがライダー陣
ランサーの消耗が
激しいとはいえ
四騎英霊の上
二騎まで破壊された
キャスター
そして七人目は
白いの状態であれば
勝利は揺るがない
ランサーはロード
エルメロイが脱落し
より下位の魔術師が
マスターに成り代わる
かつてほどの脅威はない

この辺りで
ひとつ仕掛けてみる
手もあるからな
アサシンを媒体に
ゲーの切り札
成る程
異存は
ありません
すべてのアサシンを
現地に集結させるのに
おそらく一〇分ばかり
かかると思われますが
良し 号令を
発したまえ
大博打ではあるが
幸いにして我々が
失うモノはない

第30話

--102:54:10

そうだ
たとえ奇跡をもってしても叶わぬ願いも聖杯が真に万能であるならば必ずや――
ええとセイバー？
そのブリテンとかいう国が滅んだというのは青銅の時代の話であろう？
青銅の治世であったのだろう？

そうだ
だからこそ
私は許せない

だからこそ
悔やしいのだ

あの結末を
変えたいのだ！

他でもない
私の責であるが
故に……！

ハッ

ハ

ハハハハ！

ビクッ

アーチャー
何が
可笑しい
自ら王を
名乗りククッ
ヒヒ
笛から王と
謳えられてッ：
そんな輩が
〝悔やむ〟だと？
ハッ！
これが笑わずに
いられるか!?
フハハハハ
傑作だ！
ちょっと待て
よりにもよって
自らが歴史に刻んだ
行いを否定する
というのか？
そうとも
なぜ笑う？
なぜ訝る？
王として身命を
捧げた故国が
滅んだのだ
それを悼むのか
なぜ可笑しい？
フハッ！

おいおい
聞いたか
ライダー！
この騎士王とか
名乗る小娘はッ…
よりにもよって！
…
ヒハハハハハハ
故国に身命を
捧げた、のだとき！
笑われる
筋合いが
どこにある？
王たる者ならば
身を挺して
治める国の
繁栄を願う者！
いいや
違う
王が捧げるのではない
国が
民草が
その身命を王に捧げるのだ

断じてその逆ではない
何を――ッ！
それは暴君の治世ではないか！
貴様らこそ王の風上にも置けぬ外道だぞ！
然り
我等は暴君であるが故に英雄だ
だが自らの治世をその結末を悔やむ王がいるとしたらそれはただの暗君だ
暴君よりなお始末が悪い
貴様とて…！
世継ぎを葬られ築き上げた帝国は三つに引き裂かれて終わったはずだ
その結末に何の悔いもないというのか？
今一度やり直せたらとは思わないのか？

ない
余の決断
余に付き従った
臣下たちの生き様の
果てに辿り着いた
結末であるならば
その滅びは必定だ
悼みもしよう
哀も滅そう
だが決して
悔やみはしない
そんな
ましてそれを
覆すなど！
そんな暴行は
余とともに時代を
築いた全ての人間に
対する侮辱である！

滅びの事を言れとするのは武人だけ
救済こそ民の祈りだ
解せんなぁ
王による救済？
そんなものに意味があるというのか？
で 王たる貴様は「正しき」の奴隷か？
それこそが王たる者の本懐だ！
正しき統制
正しき治世
すべての臣民が待ち望むものだろう！
それでいい
理想に殉じてこそ王だ
人は王の姿を通して法と秩序の在り方を知る
王が体現するものは王とともに滅ぶような惨いものであってはならない
より尊く不滅なるものだ

そんな
生き方は
ヒトでは
ない
そうとも
王たらんと
するならば
ヒトの生き方
など望めない
たかだか我が身の
可愛さのあまりに
聖杯を求めるという
貴様には決して
我が王道は解るまい
飽くなき欲望を
満たすためだけに
覇王となった
貴様には

無欲な王なぞ
飾り物にも
劣るわい!!

セイバーよ
「理想に殉じる」
と言ったな
なるほど
往年の貴様は
清廉にして
潔白な聖者で
あっただろう
さぞや高貴で
優しがたい姿で
あったことだろう

だが殉教などという
茨の道に誰が憧れる？

焦がれるほどの
夢を見る？

聖者は民草を
慰撫できても
導くことはできぬ

確たる欲望の
カタチを示してこそ
極限の栄華を謳ってこそ
民を 国を導けるのだ！

王とは
誰よりも強欲に

誰よりも豪笑し

誰よりも激怒する

清濁含めて
ヒトの臨界を
極めたるもの

そう在るからこそ
臣下は王を畏怖し
王に魅せられる

一人一人の民草の心に
「我もまた王たらん」
と憧憬の火が灯る

そんな
治世の…

いったいどこに
正義がある？

ないさ
王道に
正義は不要

だからこそ
悔恨もない

騎士ともの
誉れたる王よ

たしかに
貴様が掲げた
正義と理想は
ひとたび国を救い
臣民を救済した
やもしれぬ

それは貴様の名を
伝説に刻むだけの
偉業であった
ことだろう

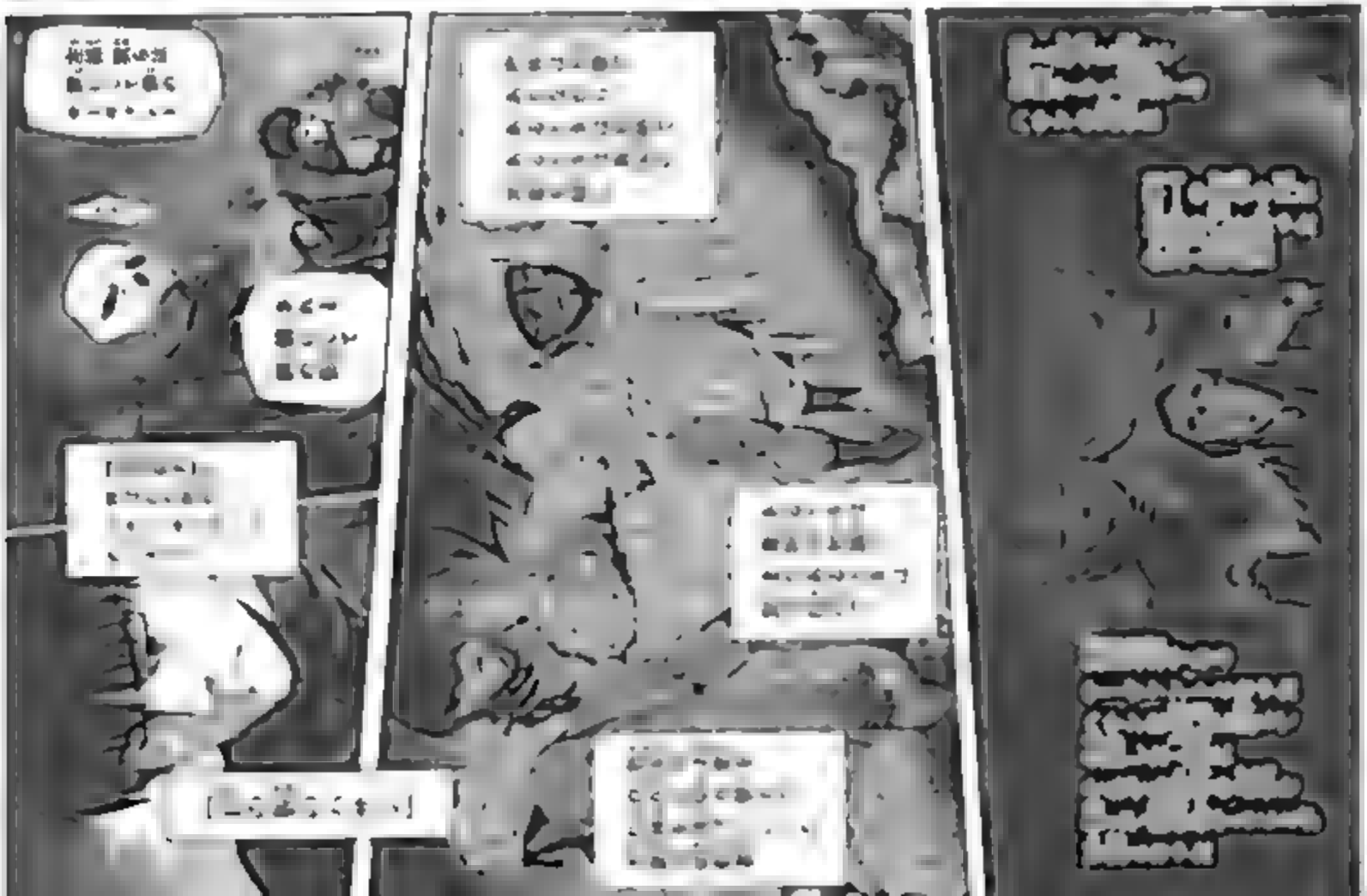
ダガな
ただ救われただけの途中がどういう末路を辿ったか——
それを知らぬ貴様ではあるまい
何——だと？
貴様は臣下を救うばかりで導くことをしなかった
「王の欲」のカタチを示すこともなく道を見失った臣下を括て置き
ただ一人で歪ましい顔のまま小綺麗な理想とやらを想い焦がれていただけよ
故に貴様は生粋の王ではない
己のあではなく人のあの王という傀儡に縛られていただけの小娘にすぎん

私は…
もし仮に
自分が守護者となって
も一刻も早く
ノーマンを踏襲
できなければ
間違いなく
乱世の戦禍は
より悲惨さを
増していただろう
だがその結末も
あのカムランの丘に
比べれば
まだましな
ものだろうか
ッ？

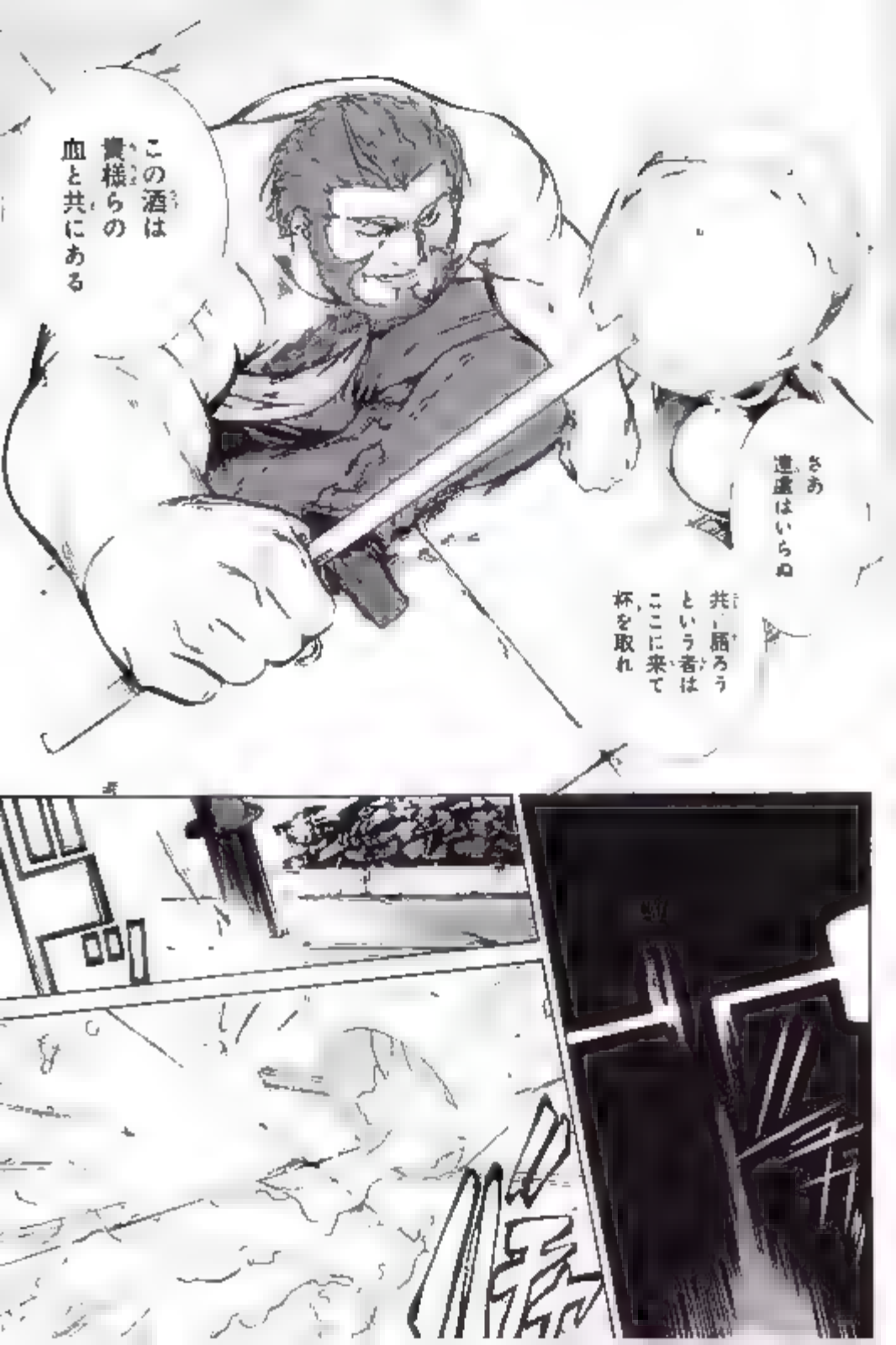
…アーチャー
なぜ私を見る？
いやなに
苦悩するおまえの
顔が見物だった
というだけさ
二日
二日
まるで獅子で花を
散らされる処女の
ような顔だった
実に我好みだ
貴様……ッ！
打撃
鍛えが
念呪にて
ポウ

ラストダンジョンの
ボスキャラを
超える力を持つ
精神を保つ
勝利せよ

アサシン――！
なんてこと
切嗣の言った通りだわ
まさか……私たち
今日までずっと
この連中に見張られていたわけ？
これは貴様の計らいか？ 金ピカ
きてな
雑種の考えることなど
いちいち知ったことではない
む……
無茶苦茶だッ！
どういうことだよ!!
何でアサシンばっかり次から次へと……
だいたいどんなサーヴァントでも一つのクラスに一体分しか枠はないはずだろ!!



奴らは勝負に出る気でいる！
これではアイリス
ファールカ
あれが客に見えるってのかぁ!?
こらこら坊主
そう狼狽えるでない
客の客を選する度量でも王の器は問われるのだぞ
なぁ爺の癖にいい加減その剣呑な覇気を放ちまくるのは控えてくれんか？
見ての通り連れが落ち着かなくて困る
あんな奴らまでも客に迎え入れるのか？征服王
当然だ王の言葉は万民に向けて発するもの
わざわざ頓珍しに来た者ならば敵も味方もありはせぬ


この酒は
貴様らの
血と共にある
さあ
遠慮はいらぬ
共に語ろう
という者は
ここに来て
杯を取れ

カカ
ククク
……
――余の言葉
聞き違えたとは
言わさんぞ？
「この酒」は
「貴様らの血」
と言った筈
そうか
敢えて地べた
ブチまけたい
というならば
是非もない……

妙…？
セイバーそしてアーチャーよこれが汝の最後の問いだ
――そも王とは孤高なるや否や？
ハハッ
王たらば……
孤高であるしかない
フッ

ハッハッハッハッ
ダメだな!!
まったくもって
解(わか)っておらん!!

そんな貴様らには
やはり余が今ここで
其の王たる者の姿を
見せつけてやらねば
なるまいて!!!

これは…
固有結界——!?
そんな
馬鹿な…
魔術師でも
ないのに
心象風景の
具現化ですって!?

もちろん
違う
余一人で
出来ることでは
ないさ
これはかつて
我が軍勢が
駆け抜けた大地
余と苦楽を
共にした勇者たちか
等しく心に
焼き付けた景色だ
この世界
この景観を
カタチにできるのは
これが我ら全員の
心象であるからさ

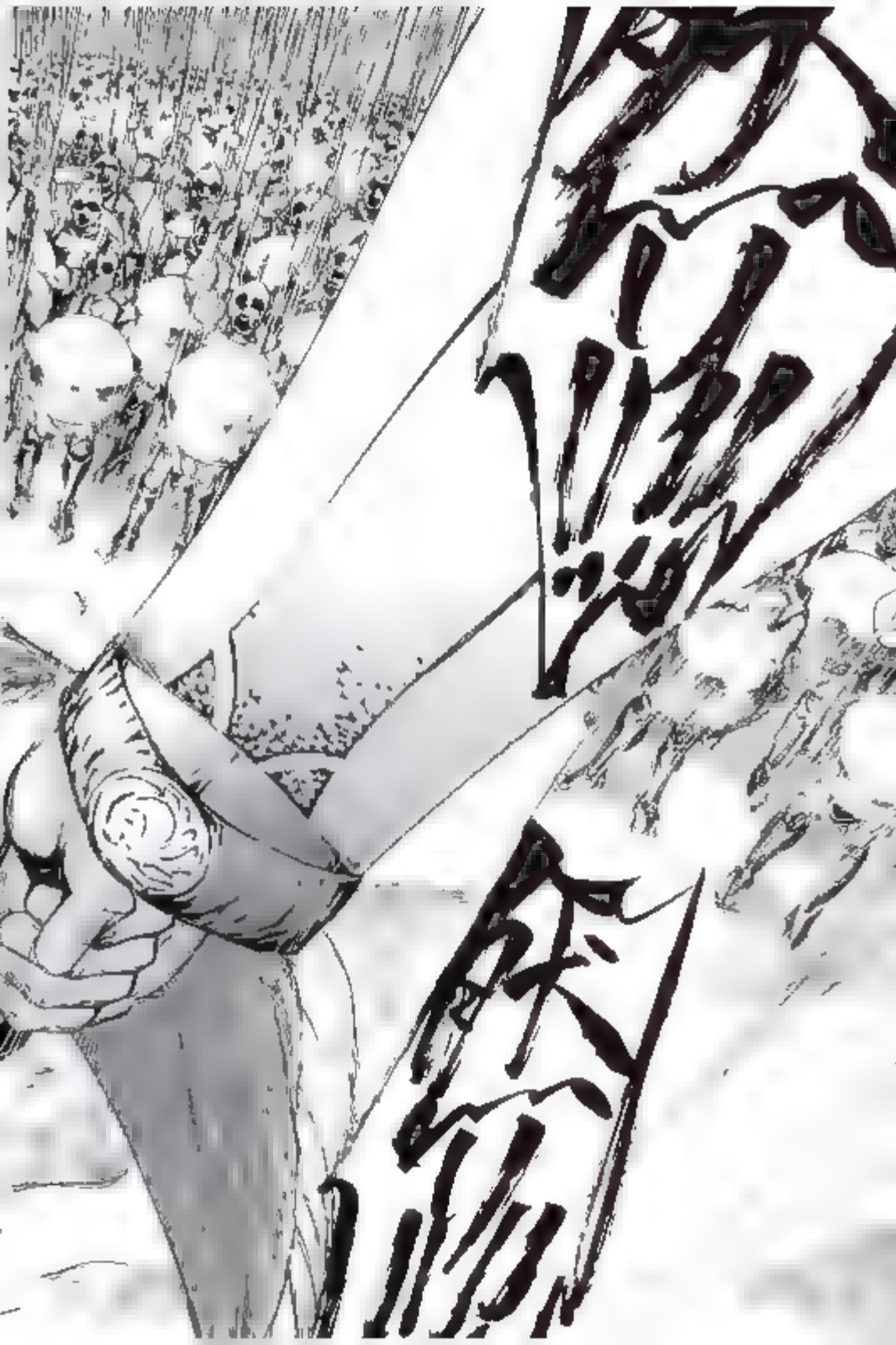
見よ！
我が無双の
軍勢を!!

肉体は滅び
その魂は英霊として
「世界」に
召し上げられ
それでもなお
余に忠義する
伝説の勇者たち！
時空を超えて我が
召喚に応じる
永遠の朋友たち！
彼らとの絆こそ
我が至宝！
我が王道！

イスカンダル
たる余が誇る
最強の宝具――
『王の軍勢（アイオニオン・ヘタイロイ）』
なり!!!

この一瞬の
合わせは
かくも神聖な
絆なるを持
王とはッ！
誰よりも
鮮烈に生き
他人を魅せる
姿を指す言葉！
すべての勇者の
希望を束ね
その頂点として
立つ者こそが
「王」!!
故に――！

王は孤高にあらず!!
その偉志はすべての臣民の志の総算たるが故に!



ビリ
ビリ
ビリ
……ッ！
さて
では始めるか
アサシンよ

Fate

In the battleground, there is no place for hope.

What lies there is just cold despair and a sin called victory,

built on the pain of the defeated.

The world as is, the human nature as always,

it is impossible to eliminate the battles.

In the end, killing is necessary evil-and if so,

it is best to end them in the best efficiency

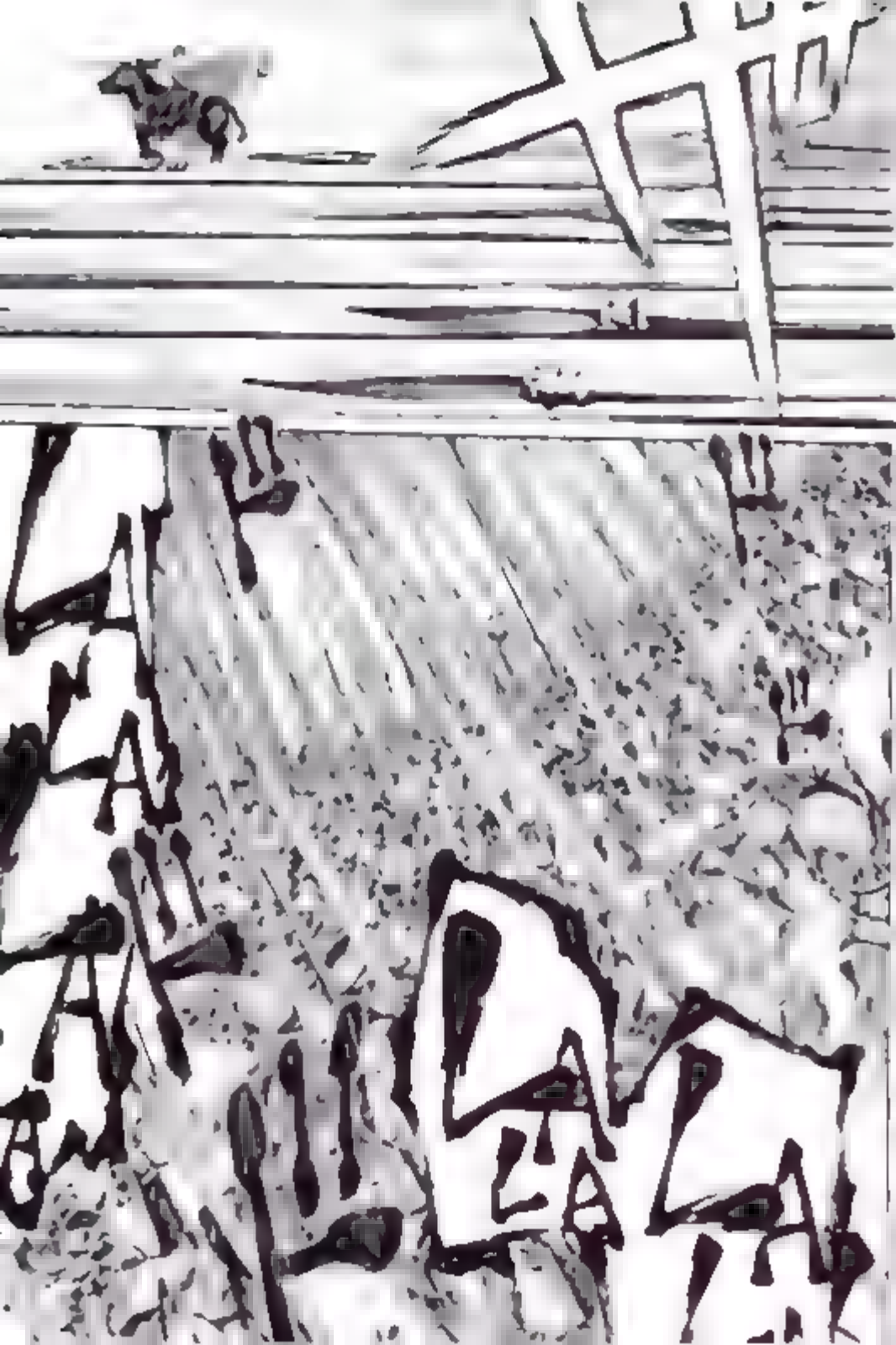
and at the least cost,

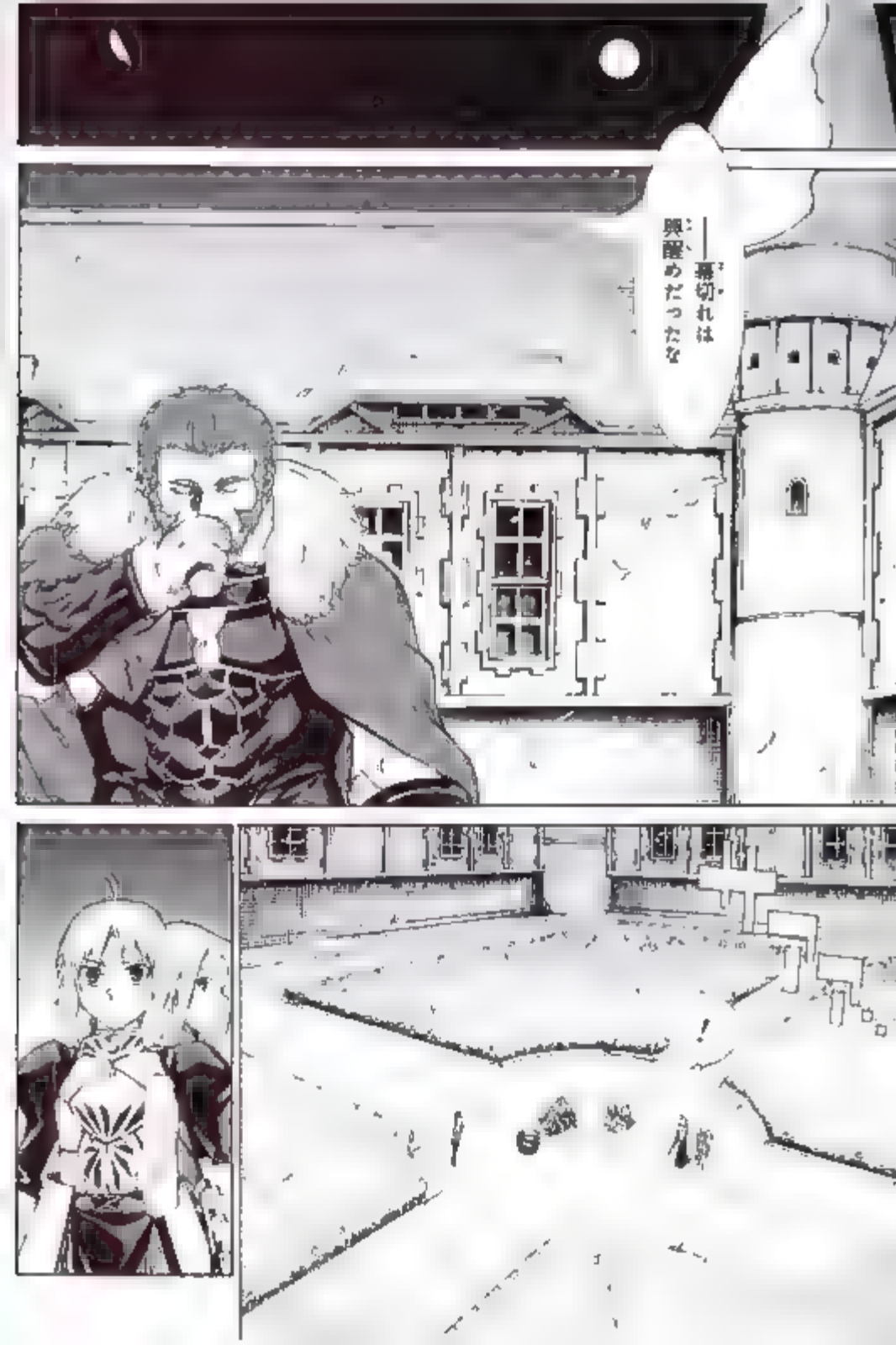
least time.

Call it not foul nor nasty.

Justice cannot save the world. It is useless.

第31話




――幕切れは
興醒めだったな

成る程な
いかに雑種はかりでも
あれだけの数を
束ねれば王と愚鈍く
ようにもなるか
ライダー
やはりおまえという
奴は目障りだ
フン
言っておれ
どのみち余と貴様とは
遠々に決着をつける
羽目になろうて
お互い
言いたいところも
言い尽くしたよなっ
今宵はこの辺で
お開きとしようか
待てライダー
私はまだ——

今宵は王が語らう
夜であった
だが余は
もう貴様を
"王"とは認めぬ
貴様はもう
黙っとけ
あくまで
私を愚弄し
続けるか？
さあ坊主
引き揚げるぞ
えっ
ほ…
あ
あ
うん

なぁ小娘よ
いい加減に
その痛ましい
夢から醒めろ
さもなくば貴様は
いずれ英雄として
最低限の誇りさえも
見失う羽目になる
貴様の語る〝王〟
というユメは
いわばそういう
類の呪いだ

いいや
私は――ッ！
耳を傾ける
必要などないぞ
おまえは自ら信ずる
通りの道を行けばいい
さっきは私を嘲笑
しておきながら
今度は私に阿るのか？
アーチャー
無論だ
おまえが語る
王道には
微塵たりとも
間違いはない
正しすぎて
その細腰にはさぞ
荷が重かろう
その苦悩
その葛藤・・・
ククッ
駄みもの
としては
中々に上等だ

おのれの器に余る
「正道」を背負い込み
苦しみに足掻く
その道化ぶり
我は高く買おう
セイバー
もっと我を
笑わせろ
褒美に聖杯を
賜わしても良いぞ

ライダーは去った
家は終わりだ
アーチャー疾く去ね
さもなくば剣を抜け
やれやれ今訪れた酒杯を求め争って国がいくつか滅んだのだぞ？
まあ良い敢えて罰するまい
道化の狼藉に怒っては王の名折れだからな
何とでもほざけ次は容赦なく斬る

せいぜい励めよ
騎士王とやら
ことによると
おまえはさらなる
我が寵愛に
値するかもな
セイバー…
最後にライダーを
呼び止めたとき
私はどう言い返す
つもりだったの
でしょうね

思い出したのです
「アーサー王はヒトの気持ちが分からない」と――
かつてそう言い残してキャメロットを去った騎士がいたことを
あれはもしかしたら円卓の騎士の皆が胸に抱いていた言葉だったのかもしれません
：セイバー…あなたは理想の王だった
それはあなたの宝具が証明しているわ

ライダーの
「王の軍勢」が
統率者としての
カリスマ性の
具現だとすれば
セイバーの
「約束された
勝利の剣」は
至尊の王道の具現
その誇りと
輝きは誰にも
否定できないわ
…たしかに私は
理想の王たらんと
自らを律し
過ちを避ける
ため私情を封じ
本音も隠した
その采配が
常勝であり
その行いが
正しくあれば
それで王とは
十全なのです
だから私は
誰にも理解など
求めなかった
たとえ孤高で
あろうとも
それは王として
正しい姿だ
だが私は
その心をはたして
ライダーほど
晴れやかに胸を
張って誇示できる
のかどうか

ライダーかけた
ドレイ神王
殺す程なか
故の私
終焉を観測
ヒトの裏切り
ごめんセイバー
運命はたとえ
不可避だとしても
それが必定
であるとは
言い切れないわ
どういう
ことですか？
未来は理だけに
導かれるものじゃない
そこには
運勢がある
偶然がある
ありとあらゆる
不条理な積み重ねが
最後に運命の形を
決めるのよ
あなたが騎士王で
あったが故に
あなたの滅びが
定まったなんて
理屈は通じない

だからこそ
あなたには
聖杯を求める
意義がある
そうですね
貴女の言うとおりだ
かつて魔術師は告げた
遠坂の剣を抱いて
それが果て、あとのは
不可避なる
破滅の運命だと
それでも両親は
なかった
だからこそ——予言通りの結末を受け入れることはできなかった
祈りに
願いが
いらなかった
これは何かの
間違いなのでは
なかと
もう一度、
もっと他に
結末があったのでは
はないかと
故に——

感謝します
アイリスフィール
私は肝心なものを
見失うところだった
王としての
私の是非を
過去に問うても
始まらない
それは聖杯に
問うべきだ
だからこそ私は
今ここにいる

そう
その意気よ
ライダーの…
宝具評価は…？

ギルガメッシュの「王の財宝」と同格

つまり、評価規格外です

「王の財宝」は武器庫にあるだけの宝具を持ってサーヴァントが現れるとき

今までの想定外だ

ここで令呪を使って脚を攻略しなければ勝ち目はないかもしれない

あのバイクを相手に…まともなやり方では「脚」を使った攻略一点しかないがいればある…

フッ

馬鹿な

そんな策略は余裕とも優雅さとも程遠い

遠坂の頭首としてある意味正しき発想だ

ライダーのマスターは
魂喰いの魔術師だ
サーヴァントの能力値をマスターの上昇に強行するこれを考えれば
もしあのライダーがトラノルなら
ロード エルメロイ
召喚されていれば
事態はより深刻だ
やはり第四次聖杯戦争の遠坂は私に味方している
アサシンを運用するための偽装が不要となった今君の能力を封じておく理由はない
はい
承知しております

予定通り
ここから先は
第二局面だ
アサシンによって
収集した情報をもとに
ギルガメッシュを
動員して敵対者たちを
駆逐していく
ライダーに
処する対策も
その中で自ずと
見えてくる
ことだろう

第31話　END

綾野貫弘、夏日りく

NEXT Fate/Zero

戦場は、さらなる混沌へ!

第⑦巻の発売を待て!!

Kadokawa Comics A

角川コミックス・エース

Fate/Zero ⑧

真じろう

原作：虚淵玄（ニトロプラス）／TYPE-MOON

2013年7月4日初版発行

発行者
井上伸一郎

発行　株式会社**角川書店**
〒102-8078 東京都千代田区富士見2-13-3　電話　(03)3238-8541（編集）
発売　株式会社**KADOKAWA**
〒102-8177 東京都千代田区富士見2-13-3　電話　(03)3238-8521（営業）
http://www.kadokawa.co.jp

装幀・デザイン
和田幸男

印刷
大日本印刷株式会社

製本
大日本印刷株式会社

初出／「ヤングエース」'13年2月号～7月号

本書の無断複製（コピー、スキャン、デジタル化等）並びに無断複製物の譲渡及び配信は、著作権法上での例外を除き禁じられています。また、本書を代行業者等の第三者に依頼して複製する行為は、たとえ個人や家庭内での利用であっても一切認められておりません。
落丁・乱丁本は、ご面倒でも角川グループ受注センター読者係宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。
この物語はフィクションであり、実在の人物・団体名とは関係がございません。

2013 KADOKAWA SHOTEN, Printed in Japan

©Shinjiro 2013　©Nitroplus/TYPE-MOON
ISBN978-4-04-120800-7 C0979

切嗣とケイネスの戦闘で半壊したアインツベルン城に、
酒樽を抱えたライダーが飛来した。
来訪の目的とは、聖杯に相応しい"王"たる"格"を自他に問う
真剣勝負「聖杯問答」を仕掛けるためだった！
騎士王・英雄王・征服王の三人が繰り広げる壮絶な"舌戦"の行方は!?
そして、剣を交えぬ戦いが進む中、
戦況は剣一刻と変わり、
ついにライダーの最強宝具が開帳される――。
王たちの舌鋒が魅せる、凄烈なる運命の第六巻!!

9784041208007

1920979005600

ISBN978-4-04-120800-7
C0979 ¥560E

定価:本体560円(税別)
発行:角川書店